

大室山周辺の火山灰について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齊藤, 俊仁 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025496

大室山周辺の火山灰について

齊 藤 俊 仁*

はじめに

伊東地域には大室山を中心として十数個の火山があり、それらの火口は二十数個を数える。火口から噴出した火山灰は互いに重なり合い、国道135号線にそって、成層したスコリアの露頭がとぎれることなく続いて見られる。

各露頭における中心的なスコリア層は、100 m 移動すると別火山のものに変わるといっても過言ではない程火口が接近しており、層厚、層序が微妙に変化してゆく。

とりわけ、伊東市街から川奈口にかけての地域では、解明が十分にされていない城星火山、鉢ヶ窪火山その他の火山の火山灰が相互に重なり合って、複雑な層序を見せている。特に上部層の特定のスコリアに興味をもって調査しているうち、2～3の所見を得たので、これを報告する。

本調査の結果をまとめるにあたり、特に地名についてご教示頂いた伊東市立宇佐美中学校加藤清志先生に、厚くお礼申し上げます。

従来の研究の概要

久野(1954)は、大室山火山群の活動と富士火山灰とを関連づけて活動史を述べる中で、最下層部を宇佐美火山溶岩、下層部を梅ノ木平火山及び城星火山噴出物層、中間層を富士火山灰及び鉢ヶ窪火山噴出物、上層部を大室山火山、小室山火山、及び巢雲山火山の噴出物と考えた。後に伊東図幅(久野; 1970)において宇佐美火山溶岩の一部を潮吹崎玄武岩類に修正して報告している。

葉室(1978)は、最下層部を潮吹崎玄武岩類層、中間層～上層部を鉢ヶ窪火山その他の火山噴出物層とし、久野が示した城星溶岩の一部を、城星火山とは別な内野溶岩流とし、内野スコリア丘の存在を示した。

調査結果

本調査のきっかけは、毎朝の通勤時に通る長美代バス停横(L15、以下ロカリティについては図2参照)に、非常に目立って見える黄色の硬質スコリアがあり、日頃から噴出火口を追究したいと思っていたところ、その地点から約200 m 下田よりの地点(L16)で宅地造成の工事が始まり、高さ約5 mの明瞭な露頭が出現して、層序が明確になったことである。

露頭は図1に示すような、硬質のスコリア層2層と黄色ローム、黒かつ色ローム、不明確なうすいスコリア層が確認でき、長美代バス停横のスコリアは、このうちのS1層に対比されることが層厚と特徴からわかった。

調査は、層序に注意し確認しながらS1層の層厚に焦点をあて、35地点(図2)で計測し比較する

*伊東市立南中学校

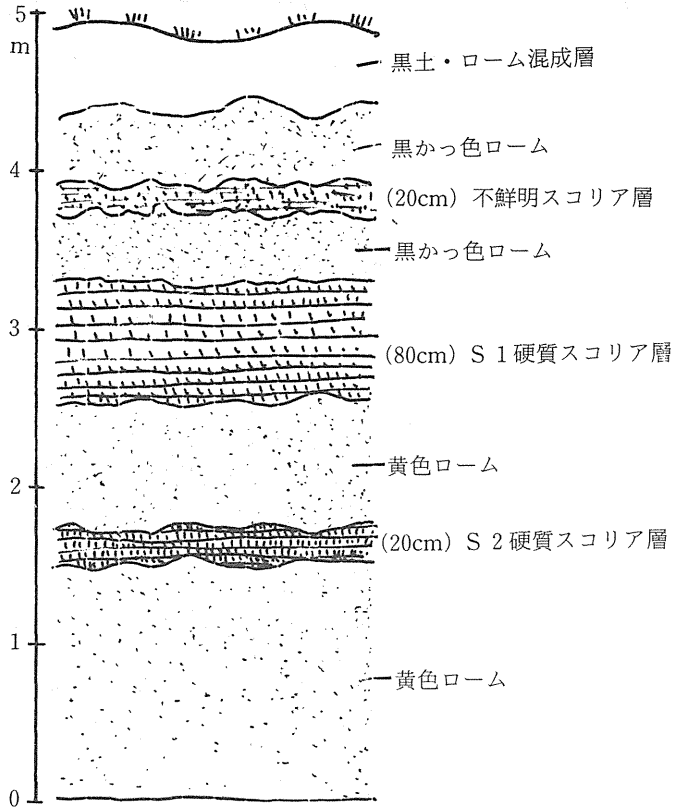


図1 L16地点の模式的スケッチ
(数字は平均の厚さを示す)

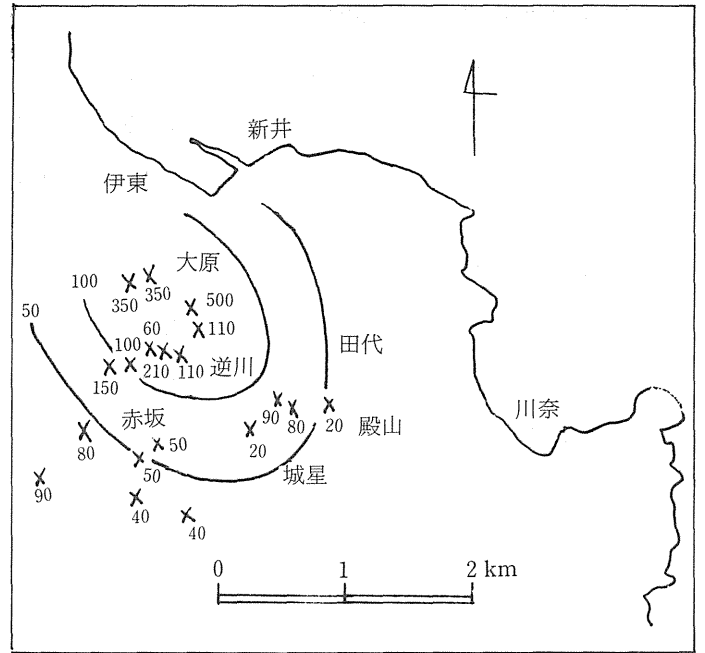


図3 S1スコリア等厚線 (単位 cm)

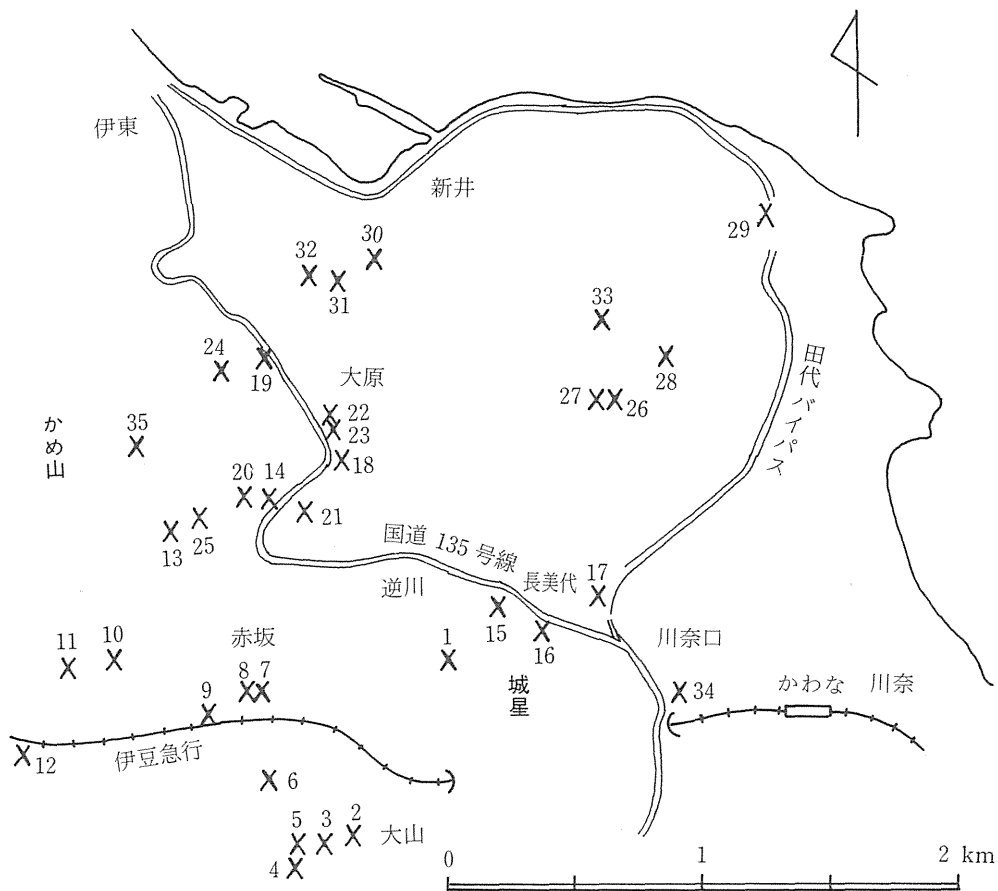


図2 S1層観察地点 (L1~L35)

方法で実施した。結果は図3のように、ほぼ北西—南東の方向に長軸をもった円形の等厚線となり、大原地区の2つのスコリア丘へ向けて厚くなり粗粒になってゆくことから、S1スコリアはこの2つの火口から噴出したものと考えられる。

千坂スコリア丘（新称）

千坂バス停横の民家の裏にある露頭（L23）では、上部に約110 cmの厚さのスコリア層があり、下部に約5 mの厚いスコリア層がみられる。下部層には直径数 cmの火山礫を多く含み、火口にきわめて近いことを示している。おそらく、裏の畑から連なる丘陵地全体がスコリア丘であろうと推定されるが、他に適当な露頭がなく、どこまで続くかを特定することはむずかしい。地形的には少なくとも数10 m以上は続いていそうで、ここを千坂スコリア丘とよぶことにする。

千坂スコリア丘は、後に述べる内野スコリア丘とともに、この地域でほぼ同時期に活動した複数の火口をもつ火山の一火口であろうと考えられるが、すぐ近くから溶岩を流した跡は見られない。

内野スコリア丘及び溶岩

葛見神社裏にある溶岩流の大露頭では、厚さ7～8 m以上もある溶岩流の下部に、直径数 cm以上ある火山礫を多く含んだ、3.5 m以上の厚さをもったスコリア層がみられる。千坂スコリアと同様に、この地点も火口にきわめて近く、スコリア堆積の後に溶岩の流出があったことがわかる。

溶岩は無斑晶質のカンラン石玄武岩で、同じ溶岩がL30、L31でも確認されることから、物見ヶ丘（大原町の一部で、丘陵地のうち、町に近い地域）一帯はこの溶岩で形成されていると考えられる。

溶岩の見られる場所が限定され、湧出丘が確認されないのは、溶岩の量が大量でなく、鉢ヶ窪などの他火山からの噴出物がおおっているためと考えられる。

尚、本然寺境内裏の露頭で、直径2～3 cmの火山礫を多く含むスコリア層が見られ、付近に別の小規模な火口の存在する可能性を示しているが、本調査では究明できなかった。

まとめ

①大原一帯に厚く堆積しているスコリアは、千坂付近及び葛見神社裏付近などに複数の火口をもった火山の噴出物である。（図4、Uは内野スコリア丘、Sは千坂スコリア丘）

②溶岩は仏現寺横、蓮正寺境内裏、竹の台幼稚園下、葛見神社裏山、祐親の墓西側などの一帯で見られ、物見ヶ丘の丘陵地を形成している。岩質はカンラン石玄武岩

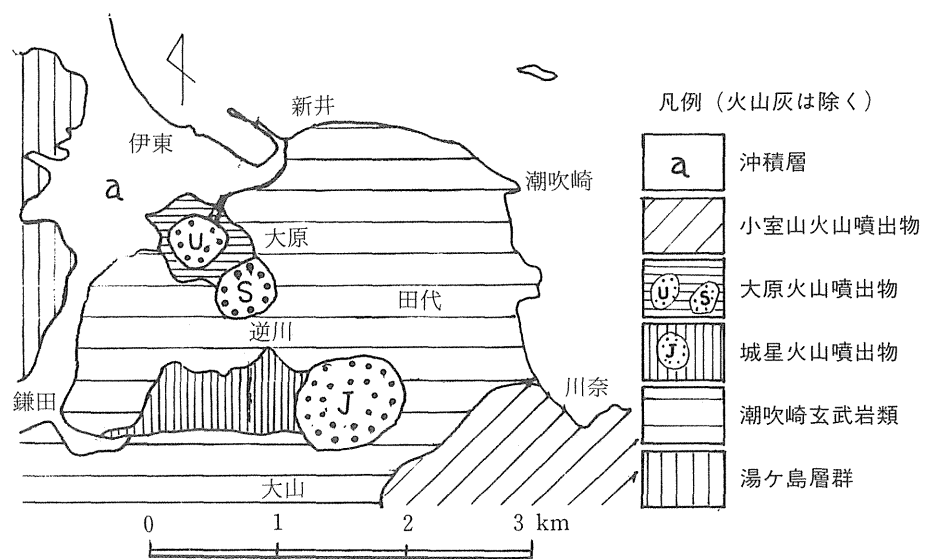


図4 伊東周辺地質図

武岩である。

③千坂スコリア丘、内野スコリア丘及び溶岩流は、その規模や分布位置を考慮して、大原火山とまとめられる。

引用文献

Kuno, H. (1954) Geology and petrology of Omuro-yama volcano group, North Izu. Jour. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. II, 9, 241-265

久野 久 (1970) 5万分ノ1地質図幅「伊東」 地質調査所

鮫島輝彦 (1966) 伊豆半島の地学案内 静岡県地学会資料 No. 9

葉室和親 (1978) 大室山火山群の地質 地質雑, 84, 8, 433-444